

多くの市民・生徒や団体が集い、平和を願う

非核平和都市宣言市民の集い・ながおか平和フォーラム・平和の森コンサートが催される

れんごう中越地協

第830号2014. 8. 11
連合中越地域協議会
長岡市東蔵王2-2-68
TEL 0258-24-0515
FAX 0258-24-8930
発行人 矢島 良彦
定価 1部10円
購読料は会費に含む



毎年、8月に多くの平和関連事業が行われている。長岡市内では、「平和の森公園」で「非核平和都市宣言市民の集い」と「平和の森コンサート」が行われ、アオーレ長岡では「ながおか平和フォーラム」と長岡空襲で犠牲となった人々の冥福を祈り「鎮魂たむけの花」等の行事が行われ、連合中越地協からも大勢参加した。



昭和20年8月1日の午後10時30分頃からはじまったB29による長岡空襲は、市内中心部約1万2千戸を消失し、学童約300名を含む、1485名の命が犠牲となった。あの日から69年を経た8月1日(金)午前8時に「非核平和都市

宣言市民の集い」が平和の森公園で開催され、遺族や小中学生、市民など約700名が参加した。「非核平和都市宣言」は、昭和59年県内で初めて制定され、長岡市連合遺族会の横山会長が宣言文を朗読した。次に、平和を願う



た放鳩の後、主催者として、森長岡市長より「悲惨な空襲が薄れつつあり、平和の尊さを伝える取り組みをこれからも続けていく」等の挨拶が述べられた。続いて、平和像の由来を新潟県教職員組合本部の木村執行委員長が話され、献花の後、長岡空襲の体験者である、山田文さんが空襲当時の様子を次のように語られた。

戻った救護所は、うめき声や泣き声でいっぱい、誰一人治療をしていない人もなく、只々見守るだけだった」と無念さを語られた。また、戦後の暮らしについても「寒い日には母が新聞紙を背中に入れてくれたことや、雪が降っても履物もなく、靴・傘・オーバーを借りたこと、焼け出されたというあだ名をつけられるなどみじめな、悲しい思いをした」とも語られた。

経団連など経済界は原発再稼働に活路を見出そうとしているが、現実的ではないようです。先日、原子力規制委員会は九州電力・川内原発の「審査書案」を了承しましたが、残りの審査にどれくらい期間が係るかわかりません▼そもそも原発の新規立地が不可能な中、「40年で廃炉」の原則に照らせばいずれば「原発ゼロ」の日がやってくる。同「Xデー」は2049年。同年に向けて国、電力会社、企業が一体となって電力革命を主導しない限り、国内での企業活動は細りかねず、国民生活は大きな負担を強いられそうです▼電力は経済活動の血流です。1973年の石油ショック後に日本が見せた対応力と柔軟性をやがて来るであろう電力ショックでも見せられるのか。重要なのは、アベノミ

東蔵王2

《No.153》



議長

矢島 良彦

クスによるつかの間の樂觀に惑わされることなく、将来への危機意識です。民主党政権下の日本の経営者は、企業を取り巻く事業環境を「六重苦」と表現していました。「円高」「高い法人実効税率」「自由貿易協定への対応の遅れ」「労働規制」「環境規制の強化」「電力不足と高い電気料金」です▼いくつかはアベノミクス改革で進展が見られましたが、悪化の一途を辿りそうなのが電力関連です。電力小売りの自由化や再生可能エネルギーの活用など一部改革が進んだ面もありますが、電気料金は上がっている一方です。これでは国内産業立地の危機に陥りかねない状況です。評論はいいので、産業界トップの意思決定がこの国を救う近道なのです。

ながおか平和フォーラム 講演落語とリレートークを催す

ながおか平和フォーラムが8月1日(金)午後1時半より、アオーレ長岡で開催され、市民約800名が参加した。



今年初のコンサートは20回目の節目であり、宇崎竜童ライブやひなたライブが行われ、会場をにぎわした。また、コール・アンカ合唱や灯籠流しも行われ、平和への祈りと平和を願う心が一つになつた一夜だった。

20回目 平和を願う

第20回平和の森コンサートが、7月31日(木)午後6時30分から平和の森公園で行われ、約800名が集った。

第1部は講演落語『ホタルの母』を嚙家桂竹丸師匠が演じた。この話は、特攻の前日に「特攻したらホタルになって帰ってきたます」と言い残して出撃した若い特攻隊員・宮川三郎さん(新潟県小

千谷市出身)と食堂を営む母・鳥浜トメさんの話だ。希望の持たない時代を精いっぱい生き、21歳という若さ

で戦死、ホタルになって帰ってきた話に参加者の多くが涙ぐみながら聞いていた。

第2部は『未来に平和をつなぐために』と題し、中高生リレートークが行われた。

サラリーマン川柳(セミの声 ジジイこれは 耳鳴か) (腹の数 一つ二つ目 真打だ) (ダイエット 財布の中身が ダイエット) (夏休み 宿題忙し おや勉強)

平和宣言

被爆69年の夏。灼(や)けつく日差しは「あの日」に記憶の時間(とき)を引き戻します。 1945年8月6日。一発の原爆により焦土と化した広島では、幼子(おさなご)からお年寄りまで一日で何万という罪なき市民の命が絶たれ、その年のうちに14万人が亡くなりました。尊い犠牲を忘れず、惨禍を繰り返さないために被爆者の声を聞いてください。

建物疎開作業で被爆し亡くなった少年少女は約6,000人。当時12歳の中学生は、「今も戦争、原爆の傷跡は私の心と体に残っています。同級生のほとんどが即死。生きたくても生きられなかった同級生を思い、自分だけが生き残った申し訳なさで張り裂けそうになります。」と語ります。辛うじて生き延びた被爆者も、今なお深刻な心身の傷に苦しんでいます。

「水を下さい。」瀕死の声が脳裏から消えないという当時15歳の中学生。建物疎開作業で被爆し、顔は焼けただれ、大きく腫れ上がり、眉毛(まゆげ)や睫毛(まつげ)は焼け、制服は熱線でぼろぼろとなった下級生の懇願に、「重傷者に水をやると死ぬぞ。」と止められ、「耳をふさぐ思いで水を飲ませなかったのです。死ぬと分かっていたら存分に飲ませてあげられたのに。」と悔やみ続けています。

あまりにも凄絶(せいぜつ)な体験ゆえに過去を多く語らなかつた人々が、年老いた今、少しずつ話し始めています。「本当の戦争の残酷な姿を知ってほしい。」と訴える原爆孤児は、廃墟の街で、橋の下、ビルの焼け跡の隅、防空壕などで着の身着のまま暮らし、食べるために盗みと喧嘩を繰り返し、教育も受けられずヤクザな人々のもとで辛うじて食いつなぐ日々を過ごした子どもたちの暮らしを語ります。

また、被爆直後、生死の境をさまよい、その後も放射線による健康不安で苦悩した当時6歳の国民学校1年生は「若い人に将来二度と同じ体験をしてほしくない。」との思いから訴えます。海外の戦争犠牲者との交流を通じて感じた「若い人たちが世界に友人を作ること」「戦争文化ではなく、平和文化を作っていく努力を怠らないこと」の大切さを。

子どもたちから温かい家族の愛情や未来の夢を奪い、人生を大きく歪めた「絶対悪」をこの世からなくすためには、脅し脅され、殺し殺され、憎しみの連鎖を生み出す武力ではなく、国籍や人種、宗教などの違いを超え、人と人との繋がりを大切に、未来志向の対話ができる世界を築かなければなりません。ヒロシマは、世界中の誰もがこのような被爆者の思いを受け止めて、核兵器廃絶と世界平和実現への道を共に歩むことを願っています。

人類の未来を決めるのは皆さん一人一人です。「あの日」の凄惨(せいさん)を極めた地獄や被爆者の人生を、もしも自分や家族の身に起きたらと、皆さん自身のこととして考えてみてください。ヒロシマ・ナガサキの悲劇を三度繰り返さないために、そして、核兵器もない、戦争もない平和な世界を築くために被爆者と共に伝え、考え、行動しましょう。

私たちも力を尽くします。加盟都市が6,200を超えた平和首長会議では世界各地に設けるリーダー都市を中心に国連やNGOなどと連携し、被爆の実相とヒロシマの願いを世界に拡げます。そして、現在の核兵器の非人道性に焦点を当て非合法化を求める動きを着実に進め、2020年までの核兵器廃絶を目指し核兵器禁止条約の交渉開始を求める国際世論を拡大します。

今年4月、NPDI(軍縮・不拡散イニシアティブ)広島外相会合は「広島宣言」で世界の為政者に広島・長崎訪問を呼び掛けました。その声に応え、オバマ大統領をはじめ核保有国の為政者の皆さんは、早期に被爆地を訪れ、自ら被爆の実相を確かめてください。そうすれば、必ず、核兵器は決して存在してはならない「絶対悪」であると確信できます。その「絶対悪」による非人道的な脅しで国を守ることを止め、信頼と対話による新たな安全保障の仕組みづくりに全力で取り組んでください。

唯一の被爆国である日本政府は、我が国を取り巻く安全保障環境が厳しさを増している今こそ、日本国憲法の崇高な平和主義のもとで69年間戦争をしなかつた事実を重く受け止める必要があります。そして、今後も名実ともに平和国家の道を歩み続け、各国政府と共に新たな安全保障体制の構築に貢献するとともに、来年のNPT再検討会議に向け、核保有国と非核保有国の橋渡し役としてNPT体制を強化する役割を果たしてください。また、被爆者をはじめ放射線の影響に苦しみ続けている全ての人々に、これまで以上に寄り添い、温かい支援策を充実させるとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大するよう求めます。

今日ここに、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、「絶対悪」である核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向け、世界の人々と共に力を尽くすことを誓います。

平成26年(2014年)8月6日

広島市長 松井 一實

平和宣言

69年前のこの時刻、この丘から見上げる空は真っ黒な原子雲で覆われていました。米軍機から投下された一発の原子爆弾により、家々は吹き飛び、炎に包まれ、黒焦げの死体が散乱する中を多くの市民が逃げまどいました。凄まじい熱線と爆風と放射線は、7万4千人もの尊い命を奪い、7万5千人の負傷者を出し、かろうじて生き残った人々の心と体に、69年たった今も癒えることのない深い傷を刻みこみました。

今も世界には1万6千発以上の核弾頭が存在します。核兵器の恐ろしさを身をもって知る被爆者は、核兵器は二度と使われてはならない、と必死で警鐘を鳴らし続けてきました。広島、長崎の原爆以降、戦争で核兵器が使われなかつたのは、被爆者の存在とその声があったからです。

もし今、核兵器が戦争で使われたら、世界はどうなるのでしょうか。今年2月メキシコで開かれた「核兵器の非人道性に関する国際会議」では、146か国の代表が、人体や経済、環境、気候変動など、さまざまな視点から、核兵器がいかに非人道的な兵器であるかを明らかにしました。その中で、もし核戦争になれば、傷ついた人々を助けることもできず、「核の冬」の到来で食糧がなくなり、世界の20億人以上が飢餓状態に陥るという恐るべき予測が発表されました。核兵器の恐怖は決して過去の広島、長崎だけのものではありません。まさに世界がかかえる“今と未来の問題”なのです。

こうした核兵器の非人道性に着目する国々の間で、核兵器禁止条約などの検討に向けた動きが始まっています。

しかし一方で、核兵器保有国とその傘の下にいる国々は、核兵器によって国の安全を守ろうとする考えを依然として手放そうとせず、核兵器の禁止を先送りしようとしています。

この対立を越えることができなければ、来年開かれる5年に一度の核不拡散条約(NPT)再検討会議は、なんの前進もないまま終わるかもしれません。

核兵器保有国とその傘の下にいる国々に呼びかけます。

「核兵器のない世界」の実現のために、いつまでに、何をするのかについて、核兵器の法的禁止を求めている国々と協議ができる場をまずつくり、対立を越える第一歩を踏み出してください。日本政府は、核兵器の非人道性を一番理解している国として、その先頭に立ってください。

核戦争から未来を守る地域的な方法として「非核兵器地帯」があります。現在、地球の陸地の半分以上が既に非核兵器地帯に属しています。日本政府には、韓国、北朝鮮、日本が属する北東アジア地域を核兵器から守る方法の一つとして、非核三原則の法制化とともに、「北東アジア非核兵器地帯構想」の検討を始めるよう提言します。この構想には、わが国の500人以上の自治体の首長が賛同しており、これからも賛同の輪を広げていきます。

いまわが国では、集団的自衛権の議論を機に、「平和国家」としての安全保障のあり方についてさまざまな意見が交わされています。

長崎は「ノーモア・ナガサキ」とともに、「ノーモア・ウォー」と呼び続けてきました。日本国憲法に込められた「戦争をしない」という誓いは、被爆国日本の原点であるとともに、被爆地長崎の原点でもあります。

被爆者たちが自らの体験を語ることで伝え続けてきた、その平和の原点がいま揺らいでいるのではないかと、という不安と懸念が、急ぐ議論の中で生まれています。日本政府にはこの不安と懸念の声に、真摯(しんしん)に向き合い、耳を傾けることを強く求めます。

長崎では、若い世代が、核兵器について自分たちで考え、議論し、新しい活動を始めています。大学生たちは海外にネットワークを広げ始めました。高校生たちが国連に届けた核兵器廃絶を求める署名の数は、すでに100万人を超えました。

その高校生たちの合言葉「ビリョクだけどもリョクじゃない」は、一人ひとりの人々の集まりである市民社会こそがもっとも大きな力の源泉だ、ということを私たちに思い起こさせてくれます。長崎はこれからも市民社会の一員として、仲間を増やし、NGOと連携し、目標を同じくする国々や国連と力を合わせて、核兵器のない世界の実現に向けて行動し続けます。世界の皆さん、次の世代に「核兵器のない世界」を引き継ぎましょう。

東京電力福島第一原子力発電所の事故から、3年がたちました。今も多くの方々が不安な暮らしを強いられています。長崎は今後とも福島の日も早い復興を願い、さまざまな支援を続けていきます。

来年は被爆からちょうど70年になります。

被爆者はますます高齢化しており、原爆症の認定制度の改善など実態に応じた援護の充実を望みます。被爆70年までの一年が、平和への思いを共有する世界の人たちとともに目指してきた「核兵器のない世界」の実現に向けて大きく前進する一年になることを願い、原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げ、広島市とともに核兵器廃絶と恒久平和の実現に努力することをここに宣言します。

2014年(平成26年)8月9日

長崎市長 田上 富久